学科TOPICS

～出会い・発見・学び。
学生，教員双方の視点から授業内容をご紹介します～

児童英語教育実習

●実践で感じた応用力の必要性

英語コミュニケーション学科
四年　福元 香寿美さん
（鹿屋農業高校出身）

児童英語教育実習では，小学校での教壇実習を三回行いました。事前に指導案を作成して実習に臨みましたが，自分のイメージ通りに進むときもあれば，児童の予想外な反応に対応できないときもありました。事前準備は大変大事ですが，それに加えその場で臨機応変に対応する力も必要だということを実感しました。

また，教師は「評価する」立場にいることで，つまり自分にとってこれまでの評価される側から評価する側への視点の転換が大事だということを学びました。それによって，また違った目線から児童を見ることができるようになり，児童の成長を見届け，その場で適切な声かけをすることが必要だと感じるようになりました。

初めは不安だったのですが，先生や友人の協力もあり，実習を終えることができました。実習クラスの担任の先生からもアドバイスをいただけたので，とてもありがたかったです。何より，児童が楽しそうに活動している姿を目にし，大変やりがいを感じることのできる実習でした。

●現場体験で得る応用力

ことばと文化学科 准教授
（英語コミュニケーション学科）
川上 典子

今年度より全国的に小学校で外国語活動が必修になりました。本学では，そうした状況に応えて，小学校での英語活動の人材育成のために規定科目の単位を取った学生に学長名での「こども英語教育能力認定証」を授与しています。この認定証と小学校教諭一種免許状課程を併せて取ることにより，外国語（英語）活動が指導できる小学校の先生になれます。

前期授業の「児童英語演習」で小学校の授業を参観し，教師の指導の仕方，授業の流れ，児童の反応をよく観察した上で，「児童英語教育実習」では実際に学生が授業を行います。年間指導計画に沿って一時間の授業案を作り，学級担任と打合せをし，教材を準備して授業に臨みます。授業後，ビデオで大学の教員と自分の授業を振り返り，次回への改善につなげます。学生が自分で実習授業をする時はとても緊張するようですが，予想以上の反応があって驚いたり，戸惑ったりと，児童に楽しかったと声を掛けられたり，そうした刺激的な経験を積むことで多くの学びがあるようです。

算数科教育法

●こどもの学びにつなげる方法を模索

こども学科　四年　栁田 優美さん
（宮崎・日向高校出身）

算数科教育法では，二人一組で一～六年生の模擬授業を行いました。私は，一年生の引き算の授業を行いました。

最初に行うことは教材研究です。教科書をよく読み，この単元では，児童にどのようなことを理解させたいのか，どのような力を身につけさせたいのかを考えます。そして，どのように授業を展開させていくのが良いのかを考えながら指導案を作成します。問題はどの順番で出すか，どのような発問をするか，板書はどのようにするか等，細かく考えなければなりません。

●試行錯誤した結果得る達成感

こども学科 准教授
洞田 勝博

こども学科では平成二十年度入学生より取得できる資格が一部変更となり，小学校教諭一種免許状を取得することができるようになりました。現四年生がその小学校課程の第一期生となります。

平成二十二年度後期には，小学校免許に必須である各教科の教科教育法の授業が一斉に開講されました。

私が担当した「算数科教育法」では，授業の一連の流れをまとめた学習指導案作成と共に媒体作成も行います。一年生なので，見ていて楽しくなるような媒体にしました。

実際の模擬授業では，指導案通りに進まないことが多く，児童役の学生は一年生のつもりで授業を受けるので，たまに教師側が答えに困るような質問も出てきます。模擬授業を通して，授業を行う前に一年生はこのような考え方をするかもしれない，このような質問が出るかもしれないというのをイメージしなければならないということ，一年生に適した声の大きさ，速さ，言葉遣いで話さなければならないということも学びました。

沢山失敗もしましたが，その分，学んだことも多く，今後は教育実習などで生かしていきたいと考えています。

日常生活援助法

●思いやりや考える力を引き出してくれる授業

看護学科 二年　山下 理沙さん
（宮崎・宮崎学園高校出身）

日常生活援助法は，看護に必要な基礎技術を学びます。

技術は五～六人の学生同士のグループ演習を通して習得します。演習内容はベッドメーキングから始まり，体位変換，バイタルサイン測定，食事介助と徐々にステップアップしていきます。看護師役，患者役を設定して行うこの演習には，実際に患者役が痛みを感じるものもあります。「痛み」と聞くとえーっと身を引いてしまう人もいるかもしれませんが，この「痛み」を感じることで私達はより患者の気持ちに近づくことができます。そして，痛みを少しでも和らげるためにはどうすればいいのかと考えることができるようになり，技術を行う際の声の大切さも分かってきました。看護師役，患者役のそれぞれが役に入り込み，思ったこと，感じたことをお互いに言い合い，ぶつかった問題を一つ一つグループ全員で考えながら，時には涙も流しながら解決へ導き，一つの技術をつくっていくのがこの日常生活援助法の講義です。講義を受けて分かったつもりになっていても，実際にやってみると技術はほとんどできません。一人ひとりが力を合わせ，練習して，やっとひとつの技術を身につけることができます。

講義が開講されたばかりの入学当初は，教員の先生方に答えを求めてばかりで，声かけも「○○しまーす」と棒読みだったものが，自分たちで積極的に話し合い，声かけも「○○しますけど○○じゃないですか」や日常的な会話を入れたりできるようになった自分をみると，一年間で成長したかな？と感じます。

●三重の関心が注げるようになるために

看護学科 准教授
花井 節子

日常生活援助法は一年間を通し，看護を実践するための基盤となる「看護技術」を修得する科目です。グループによる演習を主体とし，ティームティーチング方式で指導をします。常に複数の教員が入りグループや個別の指導をしますが，あくまでも学びの主体は「学生」で，学び始めの学生でも考える力を持っていることを信じ，ひたすら待ち続けます。その中で次第に，学び方を身につけ，教師に頼らなくなり「理解できること」「行為できるようになること」に喜びを感じているように思えます。また演習の中で，患者体験や看護者体験をすることで「相手の位置にたつ」ことの難しさや必要性を実感できるようになることを意識した指導をします。

ナイチンゲールは，看護者の基本的姿勢として，対象者に向かい合ったとき，第一の関心「知的な関心」を注ぎ，第二の関心「こころのこもった人間的関心」を重ねて，第三の関心「実践的・技術的な関心」を注ぐことで，つまり〈三重の関心〉を注ぐことを説いています。それによってその人に必要な看護を実践できると言っています。これは本学の教育理念の「いのちを育む知性と愛」を看護学科として具現化することであると考え，前述した技術の修得においても〈三重の関心〉が注げるようになることを目指して，さらに工夫を重ねていきたいと思っています。

給食調理学実習Ⅰ

●実習を通して見えてくる理想の管理栄養士像

健康栄養学科 二年
大小田 桃子さん
（鹿児島純心女子高校出身）

四月から新しい学年がスタートし，「給食調理学実習Ⅰ」の授業が始まりました。一年次よりも高度な技術を求められるこの実習は，とまどいながらもお互いが協力し合い，一つの料理を作り上げる中でいろいろな学びがあります。また，普段家庭では見かけることの少ない食材に触れることにより，調理法や栄養価はもちろんのこと，その食材が持っている力を知り，料理のハーモニーを五感で楽しめるおまけが付いています。

また，調理科学的な視点で捉え直すために，レポートにて提出しています。まとめることにより，実習だけでは分からなかったことや，他の教科との関連性などが見えてきたり，新しい知識を身につけることができます。

また，外部の方からご指導をいただくこともあり，調理技術だけではなく，その食材の栽培方法，産地ならではの調理法などを教えていただくとともに，人とのコミュニケーションの大切さも身を持って感じることができるようになりました。

これからも実習を通して感じた食事の楽しさや大切さを多くの人に伝えられる管理栄養士を目指して頑張っていこうと思います。

●実習で育む管理栄養士としての使命感

健康栄養学科 准教授
森中 房枝

東日本大震災を受けて第一回の「給食調理学実習Ⅰ」で「災害時の炊き出しの基本」について学びました。災害時などの緊急時に遭遇した時，どのような対応が求められ，避難所での食事提供が可能なのか，将来食に関わる仕事に就く学生にとって，考えるきっかけ作りになればと考え設定しました。

ガスや電気がストップした状況を想定して，野外での炊き出しに薪を使用しました。鍋や釜，ゴトクは地元の四元さんからお借りし，ご飯，豚汁，筍と切干大根の煮物，キャベツと胡瓜の即席漬けを作りました。薪でご飯を炊くのは初めての学生も多く，火吹きを使って火を起こしたり，煙に巻かれながら薪を入れたり，引いたりしながら火加減の調整をする方法など，貴重な体験となったようです。

今回は晴天に恵まれ，材料や物資など恵まれた中での実習でしたが，実際の避難所で行う時，相当な準備が必要になってきます。炊き出しをする場所の設定や器具のこと，食器や水（飲料水，洗浄水）の確保はもちろんのこと，排水処理やごみ問題など山積しています。

今，自分に何ができて，何を求められているのか，このような時だからこそ，真剣に考えてほしいと思います。

学生会主催 体育祭

平成23年4月30日（土），第8回体育祭が本学体育館にて開催されました。新入生は出会ったばかりの友と一緒に汗を流すことで友情を育みます。各学科お揃いのTシャツを作成して気合い充分。全学科・全学年が一同に会し，体育館は熱気で包まれました。

バレーボール・ドッヂボール・バスケットボール・綱引き・長縄と熱戦が繰り広げられ，最後の学科対抗リレーになると最高潮。激戦を制し，総合第1位を勝ち取ったのは，看護学科2年生でした。

企画から当日の運営まで，学生会メンバーもよく頑張りました。

女子大生のパワーをまざまざと見せつけられたイベントでした。

学生会役員

役職	氏名	学科	学年	出身校
会長	中野 早紀	英語コミュニケーション学科	3年	鹿児島南高校
副会長	西村 祐希子	こども学科	3年	鹿児島純心女子高校
	原 里美	健康栄養学科	2年	伊集院高校
書記	吉岡 里菜	こども学科	3年	喜界高校
	碇山 明伽	健康栄養学科	3年	伊集院高校
会計	古川 友理佳	健康栄養学科	3年	伊集院高校
	児島 佑季	健康栄養学科	3年	徳之島高校
	大久保 律子	健康栄養学科	2年	鹿児島中央高校
会計監査	田代 明	ことばと文化学科	2年	加治木高校
	吉水 千夏	健康栄養学科	3年	志布志高校
体育部長	山ヶ城 知世	英語コミュニケーション学科	3年	鹿児島純心女子高校
	小濱 絵美	看護学科	2年	鹿屋高校
文化部長	亀石 愛香	こども学科	2年	松陽高校
	稲満 友里恵	こども学科	2年	加治木高校

ようこそ純大へ！ 留学生紹介

台湾からの交換留学生です。

謝佩吟さん（シャ ハイ ギン）
静宜大学
愛称：みどり

鍾宜真さん（ショウ ギ シン）
静宜大学
愛称：きりん

古家禎さん（コ カ テイ）
静宜大学
愛称：ひとみ

黃靖茹さん（コウ セイ ジョ）
文藻外語学院
愛称：ゆか

蘇俞璇さん（ソ ユ セン）
静宜大学
愛称：けり

魏淑君さん（ギ シュク クン）
静宜大学
愛称：ことり

蕭敏媚さん（ショウ ミン ミ）
文藻外語学院
愛称：めい

留学報告 ～オーストラリアより～

英語コミュニケーション学科
4年　新坂 遥さん（樟南高校出身）
写真：友人たちと（下段中央が新坂さん）

私は今，オーストラリアに留学しています。平成二十二年九月にこちらへ来て，語学学校を卒業し，現在は西シドニー大学で勉強しています。

私はもうすぐ帰国しますが，多くのことを学ぶことができました。英語力が身についたのはもちろんですが，多種文化の国であるオーストラリアでの生活を通して今まで自分が知らなかった世界中の文化や習慣，宗教など本当に驚くべき発見がたくさんありました。これらの発見は自分が将来国際社会で生活するにあたって必要なことだと思います。

また，ここで多くの人との出会いや別れがありました。留学生活は決して楽しいことばかりではなく，辛いことや多くの困難もありましたが，それらを共に経験し，乗り越えてきた友達は一生の宝物です。

サークル紹介

◇◆◇フラダンス部◇◆◇

こんにちは。私たちフラダンス部は部員は四年生が十名，二年生が十四名の十四名です。毎週木曜日に練習をしており，その活動内容は主に大学祭での発表に向けたものになっています。外部講師を月に二回招きながら練習に励んでいます。

振り付けにはひとつひとつの動きに意味があり，部員一人ひとりが意味を理解しながら気持ちを込めることでフラダンスをより魅せることができます。

大学祭ではハワイならではのフラダンスや皆さんがご存じの曲まで披露します。

練習では部員，指導者含めて皆仲が良く，とても明るく笑いが絶えないサークルです。大学祭に来られる方はぜひ見てください。

部長 宮城 愛さん（看護学科四年／沖縄・宮古高校出身）

◇◆◇書道部◇◆◇

私たち書道部は，月三回火曜日の二限に練習を行っています。昨年の主な活動内容は書林への出品，県書道展や七夕展への出品，大学祭でのパフォーマンス・作品展示です。

初心者も経験者もおり，それぞれのレベルにあった指導をしていただいています。基礎から学ぶことができ，初めて書道をする人も楽しく活動できます。また，硬筆も行っているので気軽に書と触れ合えます。

昨年出来たばかりでまだまだ未熟ですが，授業の合間で時間を見つけて練習しています。これからもっと活動を広げていけるように頑張っていきたいと思います。

部長 向原 花織さん（健康栄養学科三年／松陽高校出身）

大学院TOPICS ～研究室探訪～

大学院 人間科学研究科 教授　藤田 千鶴子

今年4月に第8回生を迎えた大学院で，臨床心理士を目指す院生の皆さんとともに研究や実践をしています。専門は臨床教育学です。「学習」あるいは「教育」といった活動に限らず，学校という場・文化のなかでのこどもたちの「経験」に関心を持っています。また，質的研究方法論，特に現象学，解釈学の臨床教育学への貢献も，もうひとつの研究テーマです。

こどもたちの学校での経験に臨床心理学の立場からアプローチすると，そこで現れる現象は，不登校，いじめ等の人間関係，発達障害，不適応行動，いわゆる問題行動等，様々なものがあります。これらのテーマについての研究や心理臨床相談センターでの臨床活動を通して，様々な事柄に戸惑っていることもたち，及びかれらの周りにいる教師や家族に対して，謙虚で，そして誠実な態度で支援できる心理臨床家であることを，院生の皆さんとともに，日々心がけています。

大学院心理臨床相談センターより

心理臨床相談センター相談員　餅原 尚子

東日本大地震では，大変な惨事に見舞われ，心痛む日々が続いております。私も微力ですが，今年3月1日に発行されたばかりの「現代のエスプリ：トラウマと心理臨床」（久留一郎編集：ぎょうせい）や，ガイドライン等を，被災地の臨床心理士にお送りし，お問い合わせのあった災害復興支援者（自衛隊や警察官，社会福祉協議会等）への後方支援（惨事ストレス：CISの予防とケアに関するガイドラインをお渡しするなど）をしているところです。

県内にも少しずつ転入していらっしゃるようです。できるだけ「自然に（普通に）」そして，できるだけ「特別に」と感じているところです。

5月9日（月）から1週間，東北の被災地へカウンセリングに行って参ります。PTSD（外傷後ストレス障害）の臨床を始めて20年弱になりますが，その経験が，少しでもお役に立てることを願いつつ，人間の「生きる力」を信じていきたいと思います。